

懇話会の意見（一覧）

懇話会委員からいただいた意見について、下記の項目ごとにまとめた。

1. エリア全体のコンセプト等について
2. 機能について
 - 2-1 情報発信
 - 2-2 飲食・休憩
 - 2-3 体験・交流
3. 施設整備について
4. その他

1. エリア全体のコンセプト等について

（1）基本的な考え方

- ・青葉山公園は、市民が幸せそうに楽しんでいて、自然と人が集まってくるような場所になると良い。そのようなポテンシャルの高い公園であると思う。
- ・市民にとっては、青葉山公園を公園として楽しむことが非常に重要である。日々足を運び、特に何をしているわけでもなく長い時間過ごせることが公園の基本的な機能でもある。市民が日常的に楽しみ、憩う姿は、観光客にもアピールできると思う。

（2）エントランスとしての役割

- ・公園センターが、公園、仙台城全体を楽しみに行くためのエントランスになるということをコンセプトとして強く押し出すべきである。
- ・何か特定の物を見るための施設ではなく、本丸地区に登っていく、広瀬川に下りる、溪谷に行くなど公園センターがネットワークの中心となることが大切である。
- ・青葉山公園の主役は、仙台城跡と広瀬川であることが重要で、それらへのアクセスと公園利用を支えるものとして、周辺施設には無いコンビニ、ランナースポット、大きな休憩所があると良い。
- ・海外ではホテル宿泊者が、周辺でランニングやトレッキングをするというスタイルがある。その後、カフェで食事をとったり、くつろいだりもするが、そのような場所としてこのエリアは適している。
- ・教育旅行の拠点として、それに適した情報案内や、生徒や先生の待機場所などの利用についても考慮すべきである。

（3）周辺施設との連携など

- ・公園センターに機能を詰め込み過ぎず、シンプルにすることが重要である。周辺の施設が行える機

能は含めず、この場所ならではの内容とすべきである。

- ・青葉山公園の課題をどのように解決するかという視点、エリア全体の魅力をいかに引き出し、向上させるかという視点がコンセプトとして重要である。
- ・周辺施設は、機能がそれぞれ完結しているため、つながりがなく分断されていることが問題である。青葉山全体が公園センターによってつながりができて、一つの公園として認識されることが大切である。
- ・公園センターは、気軽に利用できる施設であり、どこに行くとどのようなことができるかわかることが大切である。その情報により、エリア全体へ誘導し、連携したイベントの開催など波及効果が生まれると良い。キャンパスツーリズムを実施している東北大学との連携も行えると良い。
- ・コンベンション開催など仙台に優位性がある部分を大事にし、それに対し現在欠けている飲食機能を提供したほうが良い。

(4) 留意点

- ・追廻地区の広瀬川沿いの石垣までが仙台城の範囲であり、公園センターの整備にあたっては、遺構と石垣の保存をしっかりと行う必要がある。
- ・藩政時代だけではなく、この場所のそれ以前や、現代までの様々な歴史についても目を向けると良い。
- ・仙台城は青葉山を利用した山城であるという歴史認識も踏まえ、樹木のある景観に留意すべきである。

2. 機能について

2-1. 情報発信

(1) 基本的な考え方

- ・公園センターでしか学べない、知ることができない情報が核になり、体感できることを加えて、特徴的な内容にすべきである。
- ・仙台を知るきっかけとなる概略や基礎知識を発信することで、市内各地の歴史解説が理解しやすくなる良い。
- ・来訪者は最初に自分が行きたい場所へ行くので、どの施設においても青葉山公園や仙台城跡の概要がわかることは必要である。
- ・ガイドにより、鳥の鳴き声や花の移り変わりなど普段気が付かないことに気付き、新たな魅力発見ができると良い。

(2) 公園の情報

- ・ここに行けば、青葉山公園のすばらしい石垣、天然記念物、博物館の展示等が見られるという情報を提供することが大切である。
- ・地形等の自然的要素をどのように利用して仙台城ができたかが理解でき、本丸があった山の頂上か

ら広瀬川に至る一連のダイナミックな地形が体感できるような仕掛けで、散策など活動の幅が広がると良い。

- ・片倉小十郎屋敷があったという歴史的な事実をどのように発信するか工夫が必要である。

(3) 外国への情報

- ・外国人への情報案内については、公園センターの機能からすると、国際センターの交流コーナーや仙台駅の案内所と扱う情報が異なるので整理が必要である。

2-2. 飲食・休憩

(1) 基本的な考え方

- ・カフェ、テラスについては周辺施設と異なる特徴を持たせ、利用しやすくし、エリアのどの施設にも人が集まるようにすることが必要である。
- ・早朝から夜間まで幅広い時間の公園利用に対応できることが大切である。
- ・地元のカフェが出店すると、他には無い特徴的なものとなり、人がより多く集まることも考えられる。

2-3. 体験・交流

(1) 基本的な考え方

- ・仙台は、観光面で特に「体験」、「アクティビティ」を強化する必要がある。公園センターの体験交流機能がそれを担うべきである。
- ・建物自体を整備するだけでは集客につながりにくい。その中で行われるソフト事業の展開が重要である。
- ・公園センターで行う体験や活動について、こんなことができるというイメージが発信できれば、青葉山公園を特徴づけることができると思う。
- ・コンベンションの開催で外国人の来訪も多くなり、仙台城の大広間をイメージするなどおもてなしの場が必要である。普段は市民が利用し、お茶会や日舞の練習ができる仙台らしさも示すことができると思う。
- ・公園センターを拠点として健康という視点で、ヨガなど、地域の方たちと一緒に活動していくことも考えられる。

(2) 市民活動との連携

- ・仙台は市民活動が盛んで、市民活動団体が公園センターを利用する立場でもあり、サービスを提供する立場にもなるという仕組みがあり、活動の連携が図れることが大切である。
- ・公園センターを利用する団体へ活動を支援する機能があると良い。それにより、活動全体がポジティブに回り、観光客にも、仙台は市民レベルが高い良い場所だというイメージが作られると思う。

- ・公園センターで活動したい人たちが集まって、話し合いをしながら、公園センターで行う活動や体験プログラムのルールを決めていくのが良い。

(3) 体験プログラム

- ・この場所でやるべき体験プログラムはどのようなものがガイドラインが必要である。検討にあたっては、「本物」、「仙台らしさ」、ここに来ないと体験できないという視点が大切である。
- ・インバウンドに対しては、茶道や書道、料理体験に加えて、自分でお茶を点てる、着物を着て写真撮影をするなど、「本物」を体験できることが重要である。
- ・民間事業者や市民活動団体の様々な視点から、個性あるプログラムを展開することが重要である。
- ・利用者のニーズは日々変わっていくので、プログラムは固定的でない方が良い。
- ・市民が楽しんでいるものが拡張されて来訪者に伝わり、一緒に楽しめる仕組みがあると良い。

(4) ユニークベニュー

- ・市民の日常的な利用をベースとし、ユニークベニューをどのように展開するかは、市民の使い方や活動を見ながら、考えていくべきである。
- ・歴史ある場所で行うユニークベニューには制限が多く、公園センターでは制限が無い、応用の利くものとなると良い。
- ・建築が良いと多くの人が集まり、ユニークベニューにもつながると思う。
- ・仙台では古い建物があまり残っておらずユニークベニューとなる建物が少ない。石垣や道の通り方など青葉山全体をユニークベニューの場として捉えることも大切である。
- ・景観と連動したお祭りなどのイベントもユニークベニューとして見せられると良い。
- ・地元産木材などでつくったテーブルや椅子があり、良い景色の中で様々なイベントを開催できると良い。

(5) 四季折々の仙台のお祭り紹介

- ・他都市の類似事例から、七夕飾りの展示だけをして、集客するのは難しい。単なる展示ではなく、この場所ならではの伊達の文化の物語などを通じて、ソフト展開が必要である。
- ・仙台の様々なお祭りをメニューとして紹介するには工夫が必要であり、訪れたときにタイムリーにその季節の雰囲気を感じられることも必要である。
- ・公園センターに現在の山鉾を納めるのは、青葉まつりの歴史的な経緯から違和感がある。昔の山鉾を復元して展示すると歴史的な意味が伝わると思う。
- ・お祭りの展示や踊りの体験は、国際センター駅やメディアテークなどで考えられる。

3. 施設整備について

(1) 基本的な考え方

- ・将来の仙台市民の誇りとなるような整備をすべきである。
- ・市民が誇りを持って案内できる場所となることが大切である。
- ・大橋から見た青葉山公園が、仙台を象徴するという考え方は大切である。
- ・大橋の下を流れる広瀬川は、武家文化と庶民生活の境でもあり、青葉山公園の整備によって仙台北下の全体イメージとしてクリアになると、市民も来訪者も仙台の街をよりイメージしやすくなると思う。
- ・片倉屋敷の復元ができないのであれば、山の上に仙台城があつて、ふもとに屋敷があるという配置の関係性、作法をしっかりと意識して残すという歴史的な解釈をしながら、公園として必要なエントランスとしての機能を盛り込むべきである。
- ・山の上を「非日常」、山の下を「日常」と捉え、公園センターが中間地点として、気持が切り変わるような場所となると良い。
- ・本丸地区からの眺望が良くなると、仙台北城と広瀬川をつなぐ公園センターの役割がよりわかりやすくなると思う。
- ・外国人が求める日本らしさと日本人が考える日本らしさは異なるため、双方に受け入れられるような施設となるべきである。

(2) 文化財の視点

- ・文化財という視点では、片倉屋敷復元は選択肢として無い。将来、高度な発掘技術により、新たな成果が得られたら、きちんと復元すれば良い。
- ・過去に屋敷があった場所に、それらしい建物が建つと誤解を招くことになる。文化財の視点では最も避けることである。
- ・「調和」や「歴史風」という言葉は、捉え方が様々で正解が無い。また、その言葉に縛られてありもしない物が作られることもあるので注意が必要である。
- ・現在提案されている公園センターの機能、特に大型の山車の展示や交流スペースの設置などを考えると、片倉屋敷の復元、及び復元に近い整備は難しいと思う。

(3) 景観デザイン

- ・大橋をメインアプローチと捉え、青葉山へ続く風景の連続性を意識し、大橋からの景観を重視して整備すべきである。
- ・建物だけではなく、空間を一体的にデザインし、遠景としてのデザイン、近づいたときの切り取られたシーン及び素材の質感など総合的に検討することが必要である。
- ・広瀬川沿道から見た青葉山という視点場も意識すべきである。
- ・城下町のエリアと通常立ち入ることができないお城のエリアがあつたという町の構造を意識できるように視点場での見え方を設定すると良い。そのような町の構造を体験プログラムでもストーリーとして生かしていくべきである。

- ・車、徒歩、自転車など多様な公園アクセスに応じたこの場所の風景づくりが重要である。

(4) 空間デザイン

- ・公園整備では、機能や施設として色々詰め込まず、「何もないこと」、「何かをできるようにしておくこと」も大切である。
- ・追廻地区全体の中でゆったりと空間を使い、シンプルなゾーニングをすべきである。
- ・整備にあたっては、自由に利用できる空間とそうでない空間の切り分けをすべきである。
- ・大橋は、デザインと、ここを渡ると青葉山と感じられるゲート性が素晴らしく、橋詰に広がる空間として、大橋と一体的にデザインすることが重要である。
- ・建物の北側と東側が公園センターの顔となる場所であり、来訪者が最初に訪れる建物北側のデザインを工夫することと、広瀬川の石垣の見せ方を含め大橋から公園センターへの誘導、登城路への誘導等の動線を整理することが大切である。
- ・シンボルとなる花など、四季折々の自然を感じられる空間とすべきである。
- ・追廻地区は開けた広い空間であり、視覚的、空間利用の手がかりとなるように植栽を配置することが大切である。屋敷林があったという史実があれば、原風景として植栽して育てて行くのも良い。
- ・樹木が少なくオープンなスペースがあるのに、樹木を植えて日本庭園をつくるのはあまり良くないと思う。
- ・日本をアピールすることに特化した大きな日本庭園ではなく、ちょっとした添景として整備するだけで良い。
- ・片倉屋敷の屋敷林を再現すると、「杜の都」の由来を伝えることができる。市民と連携して屋敷林のある生活も再現できると良い。

(5) 建築のデザイン（別資料参照）

- ・周辺の歴史性を重視した整備が大切である。片倉屋敷の復元が難しいことと歴史性を重視した整備とは別のことで、現代でも工夫して整備は可能だと思う。
- ・機能重視の近代的な建物ではなく、昔と現代が繋がり、融合された建物とすべきである。
- ・片倉家の紋をデザインに取り入れるなど、内装に仙台平（せんだいひら）や仙台堆朱（せんだいひしゅ）などの仙台の伝統工芸品を取り込むなどの工夫が考えられる。

(6) 広瀬川との関係

- ・公園センター予定地からは、広瀬川が見えないため、広瀬川が感じられるようなデザインの工夫が必要である。
- ・広瀬川へのアクセスを確保し、川の自然観察や大橋の遺構等の地域的な特徴も観察できると良い。
- ・建物を広瀬川に近づけられるのであれば、より川側に配置し、カフェだけを分棟にして、川側に配置しても良い。

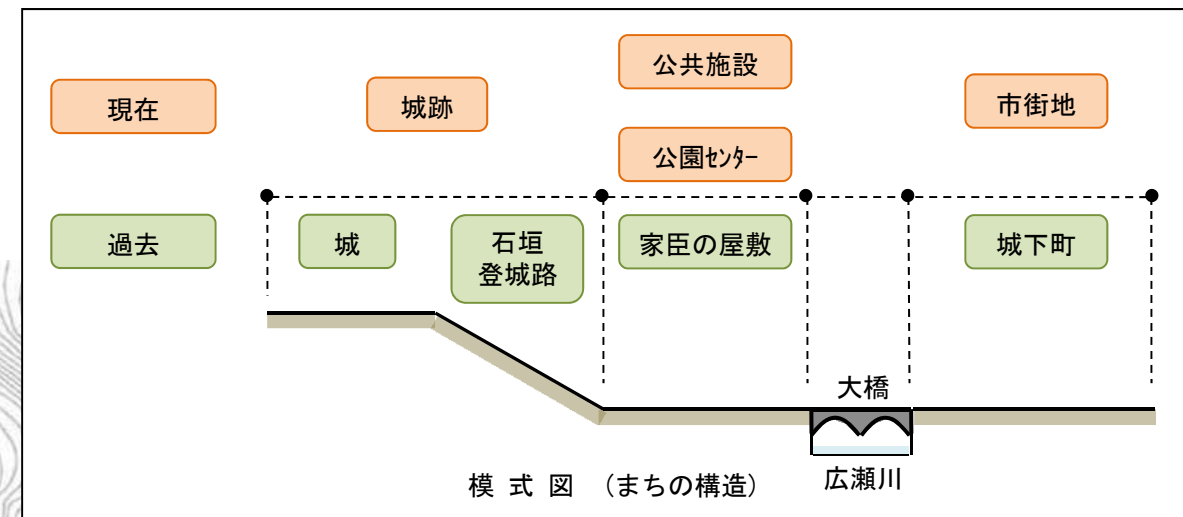
(7) 設計の進め方

- ・設計のプロセスをオープンにし、様々な議論をして、それが設計に反映されていくと、期待が高まり、市民のプライドとなるような公園センターとなると思う。
- ・ランドスケープと建築を一体的にデザインし、そのデザインを将来、青葉山公園全体のエリアマネジメントに繋げるべきである。
- ・良い建築家が選定されれば、この場所の歴史的な意味をきちんと読み取り、様々な要望についても解決し、現代的な技術を使ってふさわしい建築を行うことができると思う。
- ・発注者が具体的な案を示すのではなく、設計者の創造力が発揮できる方法とすべきである。

4. その他

- ・民間事業者の運営への参画など官民連携は当然の考え方である。
- ・広瀬川も青葉山公園と捉えることが大切であり、河川管理者との官官連携も必要である。
- ・仙台市博物館の企画展開催時には、付近の道路が渋滞する。駐車場の確保について、実情を踏まえて柔軟に対応が必要である。
- ・公園センターの機能にふさわしい名前があると良い。

「3. 施設整備について」 補足資料



◇ 将来の仙台市民の誇りとなるような場所
 ◇ 仙台市民が誇りを持って案内できる場所

◇ 本丸地区からの眺望が良くなると、仙台城と広瀬川をつなぐ公園センターの役割がよりわかりやすくなる

◇ 文化財調査結果や公園センターの機能から、片倉屋敷の復元は難しい
 ◇ 屋敷があった場所に、それらしい建物が建つと誤解を招く
 ◇ 「調和」や「歴史風」という言葉からのデザイン化は、注意が必要
 ◇ 周辺の歴史性を重視した整備
 ◇ 昔と現代が繋がり、融合された建物
 ◇ 仙台の伝統工芸品を取り込むなどの工夫

◇ アプローチの受けとなる空間デザイン

◇ 自然学習室
 ◇ 自然散策広場
 ◇ 親水空間
 ◇ 自然散策路
 ◇ 中央広場
 ◇ 水辺のデッキ

◇ 登城路への誘導

◇ 大橋の橋詰として、大橋と一体的な空間デザイン
 ◇ 大橋から公園センターへの誘導 (動線整理)

◇ 大橋からの景観、青葉山へ続く風景の連続性を重視
 ◇ 大橋から見た青葉山公園が、仙台を象徴する

◇ ゆったりと空間を使う、シンプルなゾーニング
 ◇ 自由に利用できる空間と制約のある空間の切り分け
 ◇ 建物と空間の一体的デザイン
 ◇ 遠景、近景、素材の質感などの総合的検討
 ◇ 開けた広い空間に、空間利用の手がかりとなるような植栽配置
 ◇ 片倉屋敷の屋敷林の再現により、「杜の都」の由来を伝える
 ◇ オープンなスペースに、樹木を植えて日本庭園をつくるのは良くない
 ◇ 日本のアピールに特化した大きな日本庭園ではなく、添景として整備
 ◇ シンボルとなる花など、四季折々の自然を感じられる空間整備
 ◇ 「何もないこと」「何かをできるようにしておく」余地も大切

◇ 石垣の見え方の工夫



◇ 建物から広瀬川が見えないため、広瀬川が感じられるような工夫
 ◇ 広瀬川沿道から見た青葉山への景観に留意
 ◇ 広瀬川へのアクセス確保
 ◇ 広瀬川に寄せた建物の配置検討

◇ 車、徒歩、自転車等のアクセスに応じた風景づくり